

年末に起こった実例より（2）

前回につづいて、年末に当社で実際に起こったよくありがちな実例から、「家族に頼らない」ということがどういうことなのか、一緒に考えてみましょう。

東京都内におひとりで暮らしている90歳男性のAさんが、自宅の玄関先で転倒して頭を打ち、救急車で総合病院に搬送されましたが、検査の結果は外傷のみで特に問題はなく、そのまま自宅に戻ったという実例です。



ここまでの間に、「家族」の登場が想定されている場面は、いくつあるでしょうか。

転倒したという事実を了知する、救急車を呼ぶか否かを決断する、救急車に同乗する、診療の手続きをする、医師からの説明を受ける、診療費の会計をする、自宅まで安全に送り届ける。特に異変はなく入院にも至らなかったとしても、これだけたくさんのことを、原則として家族の役割として求められているのが実情です。

しかも、ここで終わりではないのです。判断力は依然として問題なく保たれているAさんですが、最近になって転倒を繰り返すようになったという事実が示すように、足腰の衰えが進んでいるにも関わらず、介護保険を一切使っていない状況でした。これからのAさんの安全安心な生活を考えれば、何としても日常生活において介護の手を借りてもらわなければなりません。

そこでOAG職員は、総合病院からの帰りのタクシーの中で、Aさんのお気持ちに配慮しながら、Aさんがこれからも長く住み慣れたご自宅で安心して過ごしていただくためには、介護保険を申請して、介護ヘルパーさんに生活全般のことを少しだけでもお手伝いしてもらおうようお勧めし、了解していただきました。

翌日、すでに年末ぎりぎりの12月30日でしたが、以前、妹さんの件でお世話になっていた居宅介護事業所に連絡をして、これまでの経緯と、早急に要介護認定の申請ができるようにご協力いただきたい旨をお伝えしました。

ここからは、プロ同士の阿吽の呼吸です。OAG職員が家族の代わりとなって要介護認定調査の立会人となることを承諾する一方で、居宅介護事業所のケアマネさんは、近所のクリニックにて医師の意見書を書いてくださる手配等をすぐに進めてくださり、1月の連休明けには暫定で介護ヘルパーが入り、Aさんご本人が希望するリハビリ形式のデイサービスにも通える目途がたちました。

身近に頼れる家族がいなくても、きちんとした準備をしておくことで、これだけのことがスムーズに進むようになるのです。

今回は、要介護認定からサービスの利用開始までのことを、Aさんのケースから詳しくお伝えしましょう。